



本書は、脱工業社会へ移行するための枠組と方法、あるいは組織と技術を、農業の側から探りだそうというもので、著者の長年にわたる地域調査において自らの足と目で確かめた素材をふんだんに提供する。著者はここで、具体的な存在形態としての「農業」の奥に「農」という存在を想定し、個別性を通して普遍的なものを掴みだそうとする。農業は単なる食糧供給事業ではなく、われわれの生きる環境・文化・倫理の場としてとらえようとしている。

第1部は、変革する主体の側に立って、物と物、物と人、人と人の関係論として現代の社会とくに農業・食糧・環境等を認識する方法を述べている。

茨城県水府村でキウイを栽培し、新規就農者のためのトレーニングセンターを計画していたが、1995年3月急逝した宮林光之氏という脱サラ農業参入者の話は印象的である。「参加する人々の意志によって、生産・流通・消費という立場に立つことができる」と同時に、その立場を相互に変えることが可能なネットワークにしなければなりません。……サラリーマンが農業をしたいという場合、農家を含めたネットワークとすることによって可能性を高めることができます。

……現在の賃労働や商売を続けながら、現在の収入に当面は依存しながら徐々に新たな仕事を広げてゆくことができます。……」

また、「地域」というものを考える上で、幾つかの貴重な論述がある。まず、「生態系農業」は人間を含む生物の多様性と持続性が実現する地域単位の農業の構造であり、農業団地全体・集落全

体・水系全体としての生態系を考え、都市生態系と森林生態系との循環を媒介し、一体としての地域生態系を維持するシステムを実現しようとする。谷津田や陸前高田市での事例等が紹介される。

もうひとつは、NGOの「フィリピン農村再建運動」である。この運動が描く地域ビジョンは、持続可能な地域経済の振興、基本的社会サービス、自主管理の3本の柱からなっている。ここでは持続可能な農村開発地域が意識されており、環境を保全し自立的に発展できる基礎単位として、高地、低地、海岸にまたがる面積2000平方キロメートル以内、5万所帯、30万人程度で、経済的・政治的に一体化した圏域を適性規模として想定している。具体例として、ピナツポ火山の噴火で科学的な多肥集約農業に代わって取組まれ始めた有機農法による地域経済の振興構想等が示される。

第2部では農系のデザインの実際について、様々な角度から述べている。

第5章では、木曾三川輪中の広域農業公園構想などを例に日本の水田農業の在り方を検討する。

第6章では、工業社会の合理性・効率性で見落とされてきた地域の自然資源、たとえば標高差・気温差・混牧林・雪などを人間が再活用する視点を提供している。

第7章は、農系の発想、たとえば生態系農業による持続可能な農業の設計思想が工業社会を変える可能性を取り上げたものである。

第8章では、三遠南信や国東半島の民俗芸能を例として、脱工業化社会への移行の中で再評価されるべき農業文化について検討している。

本書は、論述しようとする観点も多岐にわたり、提供される事例もふんだんであり、簡単には消化できないが、「いのち、労働、地域の再生」ということを考える上で刺激的な材料に満ちている。